



門 へ 13
3332
巻 3

長柄 繪本昔鳥填卷之三

遠州小夜中山麓栗杖亭鬼卵著

本大學出版部

長柄長者と兒と智とが伝説

後漢書曰夫婦人倫之始王教之端と云す叔も長者が娘梅がえハ
いんや唐兵うが難を救い一と兒といふるれえう一とや懸想して
日々其所を通へどもあつてと兒も見え次第最早百日の預もる半
立ぬまこと其人も逢す今ハ意草の生繁らうとくいんきと成天満
神への日泰も近うに意路と百瘦枕とく上とぬ身とらうぬれ
長者のおとらね大かたうに諸医をも盡せども更ふ其志は
か一家長忠夫つうく思ひくう若き姫の内より意の病
つるまゝいられハ家娘幾代といふ年頃梅がえ姫の傍と



あつと秋を密に招き汝を娘として年頃姫の傍に居るべし當
の事もあるあや包まひやへと尋まば幾代暫く沉吟していふこ
ま仰あまの思ひ合せし事もほろひつゝや天神は糸結の折るる
の事ゆゑ唐琴と助しを児に見えしはありしにありし
か其後日毎ふ其ゆゑと通ふ時と乗物の戸をひらき見
廻しをく其を児も見えし夫よりは心のいすはありしはありし
ありと結むれば忠太夫のきれ果左門どの姫君も是に京家の
武士或は中将少将どのまゝと意し一むりんは事おもあつと人世
ゆゑゆゑを児と見初めしはありしは物好か余り不思議
の事なれば汝再び姫の心と聞紀し家もあつとせよといひて別れ
幾代は姫の庭所へ来り病ふのまゝと伺ひ入るまゝと幸と枕を
立寄姫君此ほどよりのはつらき正しく意の病ふとわづら見
ゆゑいそは初めより内側より召仕り身も隠しあつとやゆゑ候
いつたる人なりとも本意は遂にせよのまゝ人密にらたき人と叫
まひ姫も世よりまゝとあつと常盤の松の岩躑躅いふまゝを
られ意しはめのとと詠しも家身の人と思ひ死に侍のまゝ
し汝もも尋兵もれとよ誠は女は罪深しと聞つるが浅
しやらるる因果ふよりて秋いつと唐琴を救ひしを児と見
始思ひ忘る人なりといはるやあつと身立ちし夢現も其人の
慕ひ今ハ命生べきともおぢえ次さきと世の人をわづらるる
おもちを春を恋の叶ふ事もあつとらんれど世は浅き故に
と長者の姫が意せしとてわづら心のまゝにるまゝ所詮此人の為

あつと秋を密に招き汝を娘として年頃姫の傍に居るべし當
の事もあるあや包まひやへと尋まば幾代暫く沉吟していふこ
ま仰あまの思ひ合せし事もほろひつゝや天神は糸結の折るる
の事ゆゑ唐琴と助しを児に見えしはありしにありし
か其後日毎ふ其ゆゑと通ふ時と乗物の戸をひらき見
廻しをく其を児も見えし夫よりは心のいすはありしはありし
ありと結むれば忠太夫のきれ果左門どの姫君も是に京家の
武士或は中将少将どのまゝと意し一むりんは事おもあつと人世
ゆゑゆゑを児と見初めしはありしは物好か余り不思議
の事なれば汝再び姫の心と聞紀し家もあつとせよといひて別れ
幾代は姫の庭所へ来り病ふのまゝと伺ひ入るまゝと幸と枕を
立寄姫君此ほどよりのはつらき正しく意の病ふとわづら見
ゆゑいそは初めより内側より召仕り身も隠しあつとやゆゑ候
いつたる人なりとも本意は遂にせよのまゝ人密にらたき人と叫
まひ姫も世よりまゝとあつと常盤の松の岩躑躅いふまゝを
られ意しはめのとと詠しも家身の人と思ひ死に侍のまゝ
し汝もも尋兵もれとよ誠は女は罪深しと聞つるが浅
しやらるる因果ふよりて秋いつと唐琴を救ひしを児と見
始思ひ忘る人なりといはるやあつと身立ちし夢現も其人の
慕ひ今ハ命生べきともおぢえ次さきと世の人をわづらるる
おもちを春を恋の叶ふ事もあつとらんれど世は浅き故に
と長者の姫が意せしとてわづら心のまゝにるまゝ所詮此人の為



梅枝源之助ウメエダノノスケ懸想ケンソウ
 花風ハナカゼ
 才智サイチ梅枝ウメエダ
 助タスケ
 急イソ
 調テイ

糸之イトノ
 三ミ
 七シチ
 三サン
 三サン
 三サン

んん覚悟しなご何とぞ此事さんげして死なば少々の罪もろ
 かんんん思へども我口より言出人の面ぞく一首の哥を誦して
 むん跡ゆくさうせんとうふ近のりつるなりは身わづか身まる
 跡めて父上も語り浅間しき身の佛果をも得人佛事を
 も頼み交りて涙の白玉の糸はつてぬく如く泣く短冊と出たふ
 我代取上見まご

人ちれど思おとらめとさうせり秋のよきあの中
 我代も涙と流しなごかく心弱きたくいなる人ふされいつく
 むみ姫の古令よえりやわづいもゆらぬ事せんといひま
 姫頭とふりいな此ゆかすはく我息あるうち父君へさせぬ
 む世ふ聞へし長者のを児と聲おせんん宣ふまうらまのふは
 と痛んより永死後お告ふと衣引けき其後のいふたあわぬ
 我代もせんうらう次の間へ立去父忠太夫おまくのいひまれば

忠太夫も頭ごうれから蛆語の虫やあぶきさんと父上いりさで果
 ういし後まりゆか我おと恨まゆ魚しうしく九玉門後の心
 信ふてわづらんと恐ろく長者の前よ出姫の病根を児と見物ひ
 しよりの事ども姫の心の程もつごうに語らまれば長者も驚
 かす事の世ふあぶきもおと白く扱因果もりのさうたふ人
 姫意死とも我家千年近く長者号とありし身の我代は
 至りくも児を聲おせしをどくわうては先祖へかかす不便
 ら思へども娘一人見殺とるべしとさうりて涙と落しあふ
 世時妻の環傍ふあふし心の内よ姫と追失人時こそ来らん

と内心に笑ふは合へる俱に空泣して長者小向ひ居る實は
 子の事なればかく心ばよくも思召さんやの継ぎ中るは
 見殺しよせしむる世の人のさぐれき口のとよかやうん
 づかろくはる傳へ来るも食ふ景圖や一やう成人の落ふ
 まさるも志れど若滅の非人や此家納まらぬのふりや一旦姫
 の望を叶へしめ姫諸も追出さた人も見たりとも
 思ふ人ふ添とけるは姫の本望死るふと遙増るべし家の妹の
 櫻木もはるまゝの氣づかぬまげてわらへ願ふ任せを思ふ
 聳ふる一とと理を盡して宜くれば忠太夫も日頃の氣質
 の似げろく丸る事やと傳へ姫の命ふらるる一旦聳とる
 一とと諫ふ長者も恩意の涙せきめを環が貞信の詞

感心せり汝が如くいう成人の落ぶれも志れず由清正一人
 うらば様見も聳ふせん又只のを見ろくは娘諸も追放さへ
 見殺しよせしむるより増るべし忠太夫其乞見尋出内祝言紙
 取結ぶ披露のふりも見が器量次第たぶると各吐きふ
 一決しりたれ

源之助長者の方へ来る活

かか親うけいきむひしし秘發代梅がえ姫よ志せむ
 姫と夢の心地と枕もいとかるくわたり大お氣力ともま
 かしるれば長者も心の内お悦び妹さうな猶更いと嬉し
 も早く尋出して姉上のやまふ本腹めやういと忠太夫とせむ
 せえたる忠太夫も娘發代と召連住吉海道天王寺生玉など

人立多き所をたづねて此下不在話源之助の両親はかくれ目も
 泣腫く一兩日の何がとも出ざり一ヶ巴と心と烈し比丘の仰られ
 喪中とも恐まと思ひながら一日も早く敵の在家
 とあしめ多くと一七日過る候より又天満宮へ歩行とこび
 々や或日拜殿ふらぐき竹杖をか長柄のくへ帰るるに若
 き女と五十じりの男跡に付く来り急ぎ行く二人もいそだ
 ゆるやふ歩行ゆるやりに付添来り終は国島の境なる小家で
 来りていといと思ふは思ひながら小家のうちへ入むる男小家
 の口は両手をつたやうぐれい長柄の長者は家来忠太夫と申す
 今日貴公様と長者の聲がのびて一度は逆な参りては何卒後
 来駕を下さるやうかと長者は付いと慇懃に述べられ源之助

仰天してこの公様は乱心おてもなされや但一独りお化されぬ
 かと申すもいへぬ得と心を静め多くと顔色青くあて言々申す
 忠太夫猶も頭とさげ乱心も不仕此女はたづの下のされぬへハ後代も
 詞とをろへ全く忠太夫虚言とていひらけわらぬ供は参りて者
 おいといひえれば源之助いよく恐入扱いかやに家をとろく様物よ
 うとせんとの事うらぐべし後通人の余り物を貰う命をつな
 げ得ば瘦石とろへ二つ胴まごの思ひもよとび君又申の年申の日
 申の刻お生し者と思召ちがひをて生贖めても取らぬは
 松ハ戌の年よと當年十九才年月も合やとびいへは
 ゆくゆくととれうと涙ながら詫言ふ忠太夫打笑ひ何しにさす
 の事いんいんが長者の娘天神宿のおうとう鷹は鷹とあられ

忠大天父子乞食源之助と
長者の智ふ引とんと
様頼入



源之助



忠大夫

んといふに其鷹と打つ常と正助さしなり其時其元
救と見初意は煩い今命もらすくも西親の歎大うさ
うとだたしくい中た方うとも姫が命えかざり行清た
づの聲ふさしやせとの事ゆ頃日より西人は家をもつ
あしを今日天神の拜殿へ達奉るも偏は正利生と存
はひしとれは正辞退き入下さるべしと委細と述けるを源
之助も覚あ事さざり希有のゆ殊ふ大望の身といふ
聲ふたしんやと忠太夫ふ向い懇懃よ答へたる成ほど驚
と助しん覚あしんはははといふも兒人の名もる長者
の聲ふたるを其上糸身へ大い望とありし諸国と廻る
りのり何分此事はたはは免下さるやととるのり禮を

ましとる忠太夫感心し貴公孫世の常はを児さる長者
の聲ふせんとも悦し即時に受引さるやふ人今言
あまう猶更奥のくはる諸国へ出むらんとも某き
受合は祝言の姫の病氣本服して二年三年と遊
歴しるべし人間の命は救あらんといはりの隠徳なりん
まづて此方へ来りてはと幾代渚もつまは袖よとて
歎けまは源之助も比丘の詞幸はとれ辞退る事なりれ
宣ひし此事さるべし暫長者のりとおれん叔父源吉の
害と退く便しともさる心ゆり旅立せんも又しん人
く得心せしなりちあまう扱せしと珍しき事なりぬ
るを兒と長者の聲ふさるらんかたなる都合の縁結

ゆゑんごまご姫の命と助け其上旅立のよと足下受引
玉のいもも兎も角も内心は随ひし人と詞和さぎけ紙が
忠大夫發代大悦びする時へ此上の悦びやゆゑん某親
族方迄の供中湯もいせの髪も直させ小袖も召入
めつるどしと勇進んが發代諸も源之助と伴ひ歸
るの是盧生が見し邯鄲のゆめなりんか人々歎ひし
夢のつら

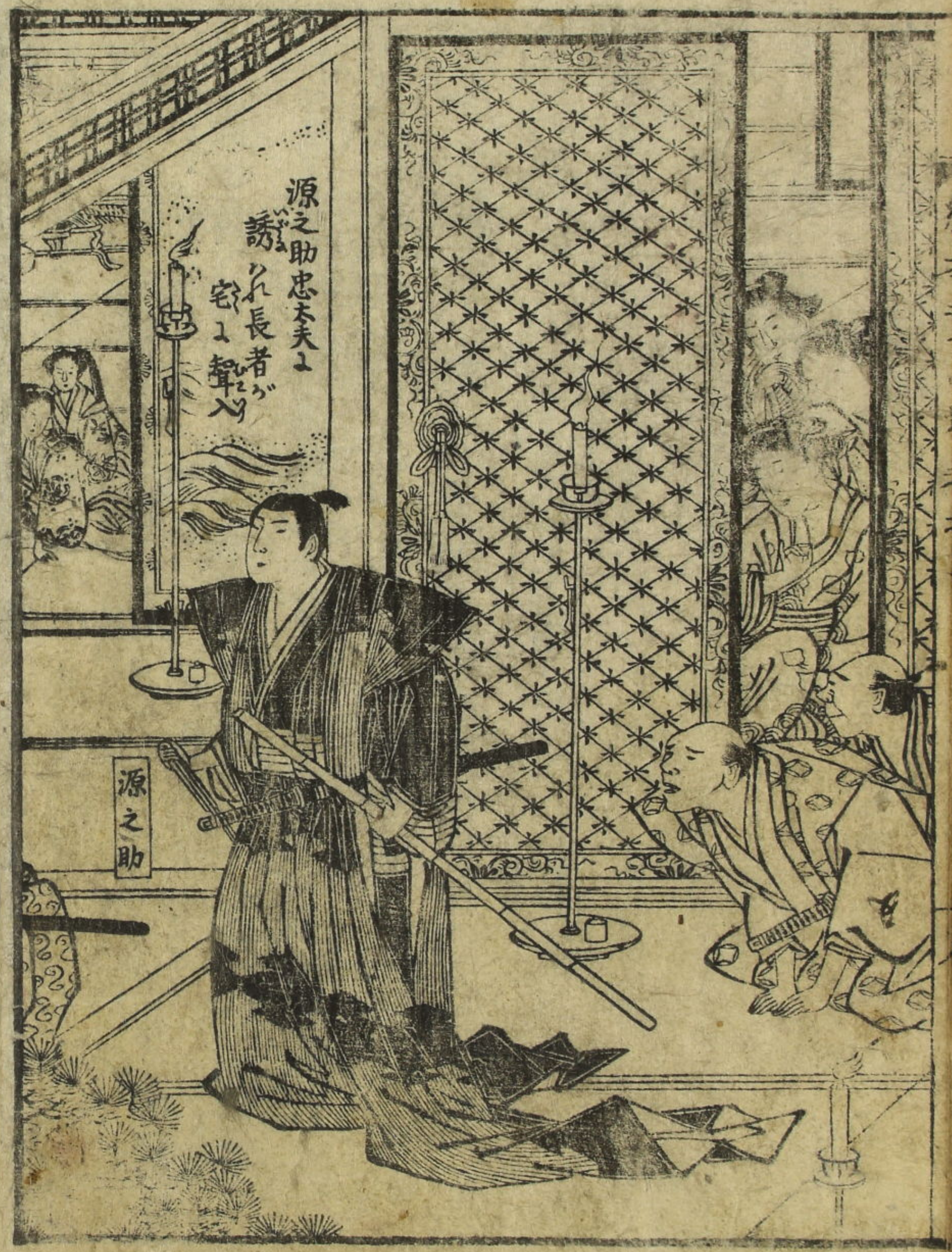
梅枝替姻環源之助の恥辱とゆゑんと計る活

長者が館より忠大夫を見と尋出し来りしゆゑん親族
別家の族の眉といはれ長者の心とゆゑんがうらた方々
ゆゑん後妻環の密よゆゑんが巴を児り来りしゆゑん

恥とゆゑん姫諸も此内と追ひ出さん快とゆゑん笑るが
さゆゑんぬ魚よりてさゆゑん其日しもさゆゑん諸親族不殘
打揃ひ尊君かさゆゑん待りゆゑん環の先を見ゆゑん来りし
恥とゆゑんて笑りんと長者ふひうい今宵姫が一世の曠よゆゑん
尊及ゆゑん長袴と着せゆゑんやと言ゆゑん長者ゆゑんも汝が
中如く家家の格なれば長上下さゆゑんとやがて忠大夫
其昔ゆゑんを見尊君と待りゆゑん程ゆゑん尊君は入
忠大夫手燭とてゆゑん先よ立ゆゑん其さゆゑん来り其形想
浅黄無垢朽葉色の中着ゆゑん黒羽二重の小袖長上下小刀
とさゆゑんたゆゑんの手ふ竹杖と携へ静ゆゑん入来る人品いゆゑん
公家高家とりゆゑんも是ゆゑん増ゆゑんもゆゑん次面の色美玉の



忠太夫



源之助忠太夫
誘われ長者が
密に聲入

源之助

うらりに櫻木が前より濃茶一ふくきにしりせよとゆらんが
 源之助早く其意を悟り仰の通人の吞さしまごの常や
 此も生もくより濃茶たふの夢小見たりもはるばる免
 蒙らんといふもさし扱の我思ふ坪なりとゆらん早く困
 伴ひのゆめをせよ殿もわらんも相伴せん無理ふ伴ひ入るれ
 櫻木の恥しきまがう挨拶して前老ほしく立たれば源之助
 上座を辞退されどもユミ一事なれば聞入るは次席ハ長者
 末席ハ環より源之助いととまうに挨拶の始末のころ所な
 まへ長者も感ト只者なればと思ひたれば環の猶も口を
 りえ拙き娘も前いと恥し連の事は聳ぶのる前を薄
 茶かひきと言ふれば辞退しさん無れりて静に立むる

半くさぬつうにやさしく將軍家の茶道よりとも是ほご
 何れと長者も恐も入り扱茶も終ま環何と云ふ恥と興
 へんと腰より笛一管取らば聳度ハ物もいふ歩行も
 折う鼻笛などりふりめも吹まひ一事もわらんか
 たり坐鋪なり此笛吹くすしあさし出せ押頂き仰
 のめ越後獅子の笛など吹まひ一事もなごうでかる名
 笛目小見ると始よひのゆりてと負赤やうな
 一戻せん長者も気の毒やわらんか事ハ今宵小限
 ぶらぶら夜も更なれば休てすわらんか環頭と打
 笛と竜を吟する声なればわらんか是非今宵所
 たりと笛押戻せん今ハ辞退しさんさうと哥口さう

三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十



新才首鳥坊巻之三

城樂と高らうふ吹きれば環を口の人ざりと打明いんもいふら
 うまれば長者ハ大不悦びかゝる聲は選出せし娘もそ手柄よ
 びも哉千代も替らぬわらわと寐所へ入るまは環ハ巴がユミ
 めとくく相違し〜い〜れとるげふ奥へ入るまは櫻木心お思ふ
 かりかゝる人と思智算ふる〜あふ城上〜をらやうりめをれと浦山
 敷心は残し〜入ける此時源之助ハ教多の娘ハ誘ひし〜れ姫
 の寐所へ入るまは夢とや結びけん覚束さ〜是より後
 唐琴ハ妹背の妹まると梅が枝が寵愛日頃よ百倍〜け
 きは源之助も一入つ〜と辛自餅がいて掌中の珠とあてたり
 此夜大雨降〜淀川筋水溢る源之助が住〜小家も
 何国へ流も行く人あ〜は〜たり此皆姻うけし〜おらるら

可憐源之助魚腹に葬らるるん志つうの〜次位〜木
 源吾より大勢捕手者〜向るれど〜小家〜
 流失〜に扱ハ源之助小家と俱〜流死せ〜
 始〜安堵〜あ〜尋〜り〜是比丘の先見
 き〜ら〜は〜り〜金〜

環源之助を毒殺せんと計る話

小悪不止大悪成宜成哉爰ハ大仁坊とて放蕩不頼の悪
 僧あり〜弁候あり〜諸人と帰伏させぬ〜
 得〜り長者も頃日佛法を帰依〜大仁坊より〜法
 語を聞ふ〜ま〜び〜成事流水の如〜長者感心〜
 傍よ〜法問〜り日夜〜が〜奥〜

くくくいつつ妻の環と密通し漆き中と成けりあま
ろの小悪不止の始なりされど長者の夢もあまの尊き僧
と思ひつゝとせ浅間しこれが源之助智とやうとせより
温潤し珠更文武の道よりこれが長者の悦大に
あつて源之助の中より王と拾ひし心地して源之助あつて
諸事叶はさふ中よりこれが環はさふといふは源より向へ
今更せんといふれ此事大に坊あり大に坊もいふ人もす
なく姫を意し殺さん事こそよかりしもの成事をおと
姫といふも追失つんとせしきし一生の不覚あり今を
毒殺より外なし天明日浪花ふ出く毒を調へ来らん其
上め謀もつるべしと立別きく此夜妹櫻木ハ源之助

心とかけ何とぞ我思ふほどともせはあり居間のくく
石つていよ来しむむ向の庭より来るものなりこのあや
とこのこの柴垣よし身とよせ立忍ぶともあまの曲者呼子の笛
と吹くさむ奥より環障子とて明くて立出まふ小柴垣
の陰よりそい曲者懐中より一包と出し約束の毒葉く
かきつる盟の盃源之助梅が枝が汁と飯と入る妹櫻木に給
仕とせ勢の身の負を出一くみるたむる罪の妹ふりて
此身の業といふものあり一糸もから合はるる人も難計
盤とて来るるもいふは次仕損どくま手ふ渡せば環ハ打
るけき人や見人早く帰つてと立別きく櫻木ハ立聞して
大に驚きこいつとせん此事父上とやあつてせん立上りし

くやく継母やぶくも母の悪事と辨へんを不孝なりゆき
 言ひては源之助君姉上の大事なりいふと千々に心と成
 しが獨心よ打うつらぎき姉の寐所へ忍びやうふ行々いふ成ゆ
 やらりえん翌まば朝がき飯もととと環櫻木ふりて中源之助
 夫婦が並び姿い誠は離人形もつて一そまもかゝ聲よ
 らやうとら看る二人の衆へ給仕して参らせ久之秘ども登格
 別ふ料理うらと大殿もわらもころこの坐鋪と相伴せんと
 言渡一れば料理人味と調へ既盛とくく既所へ立出今日
 を家好まういふうらものと蓋とるふりやと毒菜と版
 けへ打込是の一人と入すら一かんと言捨奥へ入る櫻木いうやく
 しくかけえんと源之助小居とて持出しが源之助がやうやく

き姿小見とを思つと膳は打落しるるるる白赤やうは
 恥らうとち幾代櫻木が膳を持出るは妹といふ姉のまに
 ざー置早く兄上よか膳とくといふは梅が枝大に怒り
 さあうと汝家夫よ心とけ日頃いやるる眼りさうわらは
 始くおりて今源之助どの小見とを膳を打落と不届
 何し小女がとへ膳は喰べきやとく糸久せば其のりり
 二膳のあつめの散乱してとと源之助驚きこはははは
 りととととと櫻木が取落せし怪我なりかすは心かけ
 ひとととととと姉といふ怒り君まどが妹の具負したま
 事の腹立ちやとて此終ぞくべきといふ声わらうと成ぬれ
 幾代もいらく侘ぬまど梅が枝が腹立以外の外あり物騒

源之助



源之助

長者

源之助

梅うえ

さくら木

源之助

源之助

さくら木

さくら木

夕れが長者夫婦も何事もや立出見まば其ゆりハ盃盃
 藉小打らしりくれば環へいよ驚き事のさめば尋まは梅え
 猶怒りやも次ちうくの事なり豕夫をねとんとするてふ
 くとやと嗔呷まれば橋木ハさうのふたつ人ぶせどちうなる
 所へ環が秘蔵の猫け来アかのうら散らうらうの飯喰い
 くればならまらうらうくと廻り血と吐き死うらう長者仰天
 して此はほきうら飯と喰ううらうやう此猫の血け吐き死
 ちうハ全く毒うらう人汝等が兄弟ハういこそ幸なる事なり
 今より中うらう何れもせよら中ら事なれば料理人をも吟
 味せよとくうらう源之助も打笑い兄弟心易まかやれり
 のゆめ梅えも向後うらうはうらうら事な仕ういそそれ今日

に限りと毒ゆらん父上も母君も能くは心をつけろと言
 くれは環ハ心の計事らういをさうくお打點頭き意ハ心乃
 外るれば姉を殺さんとエいのもらぶ一梅づえうらう心と付
 めくと云捨く長者諸とも奥よ入る源之助ハ寂前より點然
 うらう居うらううらう梅うえ橋木と膝元へ招き兩人の志ハ
 の世うらう忘るべき環は前の豕を忌嫌ひる事ハ祝言の其夜
 うらううらううらう今日毒殺とのがき一ハ全くうらう木ダ情
 うらううらううらう負ふりてはうらう豕此とらううらうハ非命
 の死とまさん事必定うらうやたう百羊の命を只今終るも天
 命ともいせんうらう豕ハ大切の命なり其況今こそ兩人ハ心底見
 届るれば言明とぞ何と隠さん豕ハ河内の国の郡司佐木

源太九衛門が一子同苗源之助とありあめめも父を駿河の島
田めくやと討ふかりあひ家の叔父源吾も押領せしき刺母
も源吾も殺さる兩親の敵と討んと千辛万苦してゆる内
此家の聲と成りてつづく爰も止りし叔父源吾がわれ
とたりの未る難と受けんたあかりあつし此家よりくゆ
ての内本懐と達さきと昼夜心ばらるし環匠前家は
殺害せんともあやの頼りあり是と幸ふ此家と立退敵と
首尾能討り河内ふ立歸らるる其時こそ千代もかろぬ夫
婦もくく此所とくくと聞けきつづくいふとくろぬ夢く
母に此の事をもくく涙さぐ物語は梅がえいよくと泣出
されば物めより只入るばと意もつとせと君の仰一ツと

ていふもや母の言の葉もゆきばいふもはらわれ供ふたりあ
系も長者の娘あまゆゆきばいふもはらわれ供ふたりあ
意と逐あひは帰国と待ゆつと吹り生死不定の世の中れ
ハ系早く死しなば妹櫻木は系と思召あらし名残やせめて
半年も添まつとせ旅立ちあくとさめぐと泣くは梅木もあま
りげ姉上勿躰たれよと宣ふの哉千代ハ千代までもいひげ
まらる定かた浮世やと天あゆぐ地ふきらび歎けつといふハ
姉上父上も母の悪事とつげまつとせ此家と追退多る源之助
君の悪心のゆきしも旅立ちるん只母上の悪心ゆき急ぎ旅立
あふかりばやと言ふは姉ハ涙の貞と打ちあやも母のよら
ぬは心とあつし後の親こそ大事といふりけり殊ハ系意死

だりしと母の一言ふりて家憲の叶いしるれ母の悪事
 顯しが名残やくはゆもて今宵旅立ちべし我の女の
 り内供ハサも一念ハ陰身おそひくは武運と守る春
 守るかると心弱く思ひ多ると一声のりと伏沈くる源之助
 胸と鬼のれ竹杖いつ提立出まは梅うえ榎木西へ
 手箱より金一色どりいど是はわらわが志よける旅の用
 立むりてと言ふは源之助押床いふ此家の金一錢も身
 へそと出んと路用とくくする手楯よ入聲とくりしなごい
 んいと口惜と見とわたりぬきど是見よ用意の金ハあり又此
 竹杖ハ旭丸とて先祖三郎盛綱頼朝公より拜領の名釵るれ
 ハ肌身とともさび持とるる春ハ先達く忠太夫約束せし如

く諸国と遍歴せんと旅立し趣披露し多々名残ハつる命
 けくハ再會とて心づくと袖引とて出て出行く

梅、うえ

んをのり

のり

繪本黃鳥墳卷之三終

繪本黃鳥墳卷之三

